

第51回名古屋春栄会
演目のあらまし

平成28年1月31日

名古屋春栄会事務局

目 次

翁（おきな）	1
岩舟（いわふね）	3
熊野（ゆや）	4
猩々（しょうじょう）	5
小鍛冶（こかじ）	6
花月（かげつ）	7
淡路（あわじ）	8
笠ノ段（かさのだん）〔芦刈（あしかり）〕	9
鐘馗（しょうき）	10
舟弁慶（ふなべんけい）	11
弓八幡（ゆみやわた）	12
誓願寺（せいがんじ）	13
芦刈（あしかり）	14
難波（なにわ）	15
〔能のミ二知識	16〕

このリーフレットは、第51回名古屋春栄会の演目を解説したものです。
演目の記載順は、番組の順です。
詞章については、金春流の謡本から転載しました。

翁（おきな）

【作者】 不詳

【登場人物】 シテ：翁（面・翁）、狂言：千歳、狂言：三番叟

【概要】（素謡の部分…シテが退場するところまで）

翁は「能にして能にあらず」と言われています。演劇性を持たない、天下泰平、国土安全、五穀豊穰を祈願する儀式としての舞のみの能です。翁、千歳、三番叟の3人がそれぞれ別に舞を舞います。颯爽たる千歳の舞、荘重な翁の舞と続き、その後、翁は退場し、千歳と三番叟の問答の後、三番叟が「揉之段」と「鈴之段」とい2つの力強い舞を舞います。

【詞章】

シテ どうどうたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

シテ 所千代までおわしませ。

地謡 われらも千秋さむらおう。

シテ 鶴と亀との齡にて。

地謡 幸ひ心にまかせたり。

シテ どうどうたたりたたりら。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

千才 鳴るは瀧の水。鳴るは瀧の水。日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

千才 たえずとうたり。たえずとうたり。

<千才舞>

千才 所千代までおはしませ。われらも千秋さむらおう。鳴るは瀧の水。

日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

<千才舞>

シテ あげまきやとんどや。

地謡 よばかりやとんどや。

シテ ざしていたれども。

地謡 まいろうれんげじや。とんどや。

シテ 千早ふる。神のひこさの昔より。ひさしかれとぞよわい。

地謡 そよやりちや。とんどや。

シテ 千年の鶴は。万才楽と歌うたり。又万代の池の亀は。甲に三極を備えり。

天下泰平国土安穩。今日のご祈祷なり。ありわらや。なじよの翁ども。

地謡 あれはなじよの翁ども。そやいづくの。翁ども。

シテ そよや。

＜翁舞＞

シテ 千秋万才の。喜びの舞なれば。一舞まおう万才楽。

地謡 万才楽。

シテ 万才楽。

地謡 万才楽。

岩舟（いわふね）

【分類】 初番目物（脇能＝荒神物）

【主人公】 前シテ：童子（面・童子）、後シテ：龍神（面・黒髭（泥小飛出））

【作者】 不詳

【あらすじ】（今回の仕舞の部分…下線部）

時の帝が摂津国（大阪府）住吉の浦に、新たに浜の市を開き、高麗や唐土の宝物を買い取るようにとの宣旨を下されます。そこで、命を受けた勅使が住吉へ下向します。すると、そこへ姿は唐人ながら、日本語を話す一人の童子が、銀盤に宝珠を乗せて現れます。勅使が不審に思って問いかけると、童子はめでたい御代を寿いで来た^と告げ、また、この宝珠も君に捧げたい、龍女の珠とでも思っただけ^{れば}ありがたいと言います。そして、住吉の浜に立ついろいろな市のことなどを語ります。また、このあたりの景色をめで、さらに天がこのめでたい代をたたえて、極楽の宝物を降らすために、岩船に積み、今、ここへ漕ぎ寄せるところだと言います。そして、自分こそは、その岩船を漕ぐ天ノ探女であると明かして消え失せます。

<中入>

続いて、海中に住む龍神が、宝を積んだ岩船を守護するために現れます。そして、龍神は八大龍王達も呼び寄せ、力を合わせて岩船の綱手を引き寄せ、住吉の岸に無事に到着させます。山のように積まれた金銀珠玉は、御代の栄を寿ぐように光輝きます。

【詞章】（今回の仕舞の部分の抜粋）

宝をよする波の鼓。拍子を揃えてえいやえいや。えいさらえいさ。引けや岩船。天の探女か。波の腰鼓。ていとうの拍子を。打つなりやさざら波、えめぐりめぐりて住吉の松の風。吹き寄せやえいさ。えいさらえいさと。押すや唐簾の。押すや唐簾の潮も満ち来る。波にのって。八大龍王は。海上に飛行し。御船の綱手を手に繰りからまき。潮にひ引かれ。波にのって。長居もめでたき住吉の岸に。宝の御船を着け納め。数も数万の捧げ物。運び出だすや心のごとく。金銀珠玉は降り満ちて。山のごとくに津守の浦の。君を守りの神は千代まで。栄うる御代とぞ。なりにける。

熊野 (ゆや)

【分類】三番目物（現在鬘物） *中之舞

【作者】不詳

【主人公】シテ：熊野（面・小面）

【あらすじ】（今回の仕舞[クセ]の部分…下線部）

平宗盛は遠江国（静岡県）池田の長の熊野を愛妾として都に留めています。その熊野が故郷に残している老母が病気となり、熊野の帰国を促す手紙を侍女の朝顔がたずさえて都に上って来ます。心弱くなっている母の様子に熊野は宗盛のもとに行き、その手紙を見せて暇を乞うことにします。熊野は宗盛の邸に行き、母の手紙を読み上げて、今一度母に会いたいと帰国を願いますが許されません。宗盛はかえって熊野の心を引き立てようと花見の供を命じ、牛車に乗って一緒に清水寺に向かいます。都大路の春景色にひきかえ、車中の熊野はひたすら母を案じており、清水に着いて車を降りると、まず観世音に母の命を折ります。やがて花の下で酒宴が始まり、熊野は宗盛の勧めで、心ならずも興を添えるためにあたりの風物を眺めながら舞いを舞い、花の美しさをたたえます。ところが舞の途中でにわかには村雨が降り出し、花を散らします。熊野は舞をやめ、「いかにせん都の春も惜しけれど、馴れし東の花や散るらん」と歌を詠み、それを短冊にしたためて宗盛に差し出します。その歌を見た宗盛は、熊野の心を哀れに思い、東国に帰ることを許します。熊野は喜び、これも観世音のおかげと感謝し、宗盛の気持ちの変わらぬうちにと、その場から故郷に旅立ちます。

【詞章】（今回の仕舞[クセ]の部分の抜粋）

寺は桂の橋柱。立ち出でて峰の雲。花やあらぬ初桜の。祇園林下川原。南をはるかに眺むれば。大悲擁護の薄霞。熊野権現の移ります。御名も同じ今熊野。稲荷の山の薄紅葉の。青かりし葉の秋。また花の春は清水の。ただ頼め頼もしき。春も千々の花ざかり。

猩々（しょうじょう）

【分類】五番目物（祝言物） ＊中ノ舞

【作者】不詳

【主人公】シテ：猩々（面・猩々）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

親孝行で評判の高い高風という男が、揚子の市で酒を売ると富貴の身になるという夢を見、そのお告げのとおり酒を売って金持ちになりました。その高風の店に来て酒を飲む者で、いくら飲んでも顔色が変わらない者がいるので、ある日、名を尋ねると海中に住む猩々だと明かして帰って行きました。そこで、高風はある月の美しい夜に潯陽の江のほとりに酒壺を置き、猩々の出てくるのを待つことにします。やがて、猩々は薬の水とも菊の水とも呼ばれる銘酒の味をみたい、よき友と会うことを楽しみに、波間から浮かび出て、高風と酒を酌み交わします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸辺の芦の葉は風に吹かれて笛の音を奏で、波の音は鼓の調べのように響きます。この天然の音楽にのって、猩々は舞い出します。そして高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

よも尽きじ。よも尽きじ。万代までの竹の葉の酒。汲めども尽きず。飲めども変らぬ。秋の夜の盃。影も傾く入江に枯れ立つ。足元はよろよろと。酔いに伏したる枕の夢の。覚むると思えば泉はそのまま。尽きせぬ宿こそ。めでたけれ。

小鍛冶（こかじ）

【分 類】五番目物（略脇能＝鬼畜物、靈験物） ＊舞働

【作 者】不詳

【主人公】前シテ：童子（面・童子）、後シテ：稲荷明神（面・小飛出）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

一条天皇がある夜に不思議な夢を見られたので、橘道成を勅使として、当時名工として知られた三条の小鍛冶宗近に御剣を打つことを命ぜられます。宗近は宣旨を承りはしたものの、優れた相槌の者がいないので途方にくれ、この上は奇特を頼むほかはないと、氏神である稲荷明神へ祈願のために出かけます。すると童子が現れ、不思議にも既に勅命を知っており、君の恵みによって御剣は必ず成功すると安心させます。そして、和漢の銘剣の威徳や故事を述べ、特に日本武尊の草薙剣の物語を詳しく語って聞かせ、神通力によって、力を貸し与えようというて、稲荷山に消えていきます。

<中入>

宗近は、しめ縄を張った壇をしつらえ、仕度を調べて、祝詞を唱えて待ち構えます。すると、稲荷明神の使わした狐が現れ、相槌となって御剣を打ち上げ、表に小鍛冶宗近、裏に小狐と銘を入れ、勅旨に捧げると、再び稲荷山に帰っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

天下第一の。天下第一の。二つの銘の御剣にて。四海を治めたまえば。五穀成就もこの時なれや。すなわち汝が氏の神。稲荷の神体小狐丸を。勅使にさきげ申し。これまでなりと言ひ捨ててまた。むら雲に飛び乗り。またむら雲に飛びのりて東山。稲荷の峰にぞ。帰りける。

花月（かげつ）

【分類】 四番組物（芸尽物） *羯鼓

【作者】 不詳

【主人公】 シテ：花月（面・喝食）

【あらすじ】（今回の独吟〔クセ〕部分…下線部）

子どもが7歳の時、行方不明になったので、父は僧となり、その子を捜して、九州彦山の麓から出て諸国を廻り、ついに都に着き、清水寺に詣でます。そして、来合わせた門前の男に、何か珍しいものはないかと尋ねると、男は花月という喝食の話をして。まもなく、その花月が現れ、すすめられるままに恋の小歌をうたってたわむれます。そこへ鶯が来て、枝を飛び交い花を散らすので、弓矢で狙いますが、仏の殺生戒を破るまいと思いとどまります。そして、今度は、清水寺の縁起を曲舞で舞って見せます。先ほどから花月の様子を見ていた旅僧は、これこそ行方を尋ねる我が子ではないかと思い、さまざまの質問をし、自分は父だと名乗ります。花月は父との再会を喜び、門前の男の所望にまかせて、羯鼓を打って、天狗にさらわれてからの身の上話を謡います。そして、これからは父と共に仏道修行に出ようと立ち去ってゆきます。

【詞章】（今回の独吟〔クセ〕の部分の抜粋）

そもそもこの寺は。坂の上の田村丸。大同二年の春の頃。草創ありしこのかた。いまも音羽山。峯の下枝のしただりに。濁るともなき清水の。流れを誰か汲まざらん。ある時この瀧の水。五色に見えて落ちければ。それをあやしめ山に入り。その水上を尋ねるに。こんじゆせんの岩の洞の。みずの流れに埋もれて。名は青柳の朽木あり。その木より光さし。異香四方に薫ずれば。さてはうたかう所なく。楊柳観音の。御所変にてましますかと。皆人手をあわせ。なおもその奇特を。知らせてたべと申せば。くち木の柳は緑をなし。櫻にあらぬ老木まで。皆白妙に花さきけり。さてこそ千手の誓いには。枯れたる木にも花さくと今の世までも。申すなり。

淡路（あわじ）

【分類】 初番目物（脇能＝男神物） ＊急ノ舞

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ：老翁（面・尉面）、後シテ：伊邪那岐神（面・大天神）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

今上の帝に仕える大臣と従者が住吉・玉島の社へ参詣した後、淡路の国に古跡見物に立ち寄ります。淡路国ではちょうど、苗代づくりの季節なので、水田の取水口にいくつもの御幣が立ててある。農作業に御幣とは、さてはここは神田かと、大臣が作業をしている老人に理由を問うと、老人は「谷水を五十串立て、苗代小田の田ねまきにけり」という和歌を口にし、二の宮の神田である旨を伝えます。そこで大臣は「ここが二の宮なら、一の宮はゆず葉権現か」と再び問います。老人はそれに対して、大臣の考え違いを指摘し、二の宮とは神社の社格を表わすのではなく、イザナギ・イザナミの二神を一緒に祀っているために付いた名称でだと説明します。そして、イザナギには万物の種を蒔く意味があり、イザナミにはその収穫を収めるという意味があるので、当地は今日でも、豊かな実りに恵まれた土地となっているのだといいます。そして、イザナギとイザナミによる国生み神話を物語ります。話が終わると、老人は「神代の天の浮橋の様子を見せよう」と大臣たちに告げ、「烏羽玉のわが黒髪も乱れずに、結び定めよ小夜の手枕」という和歌を残して、天上に消えてしまいます。

<中入>

その夜、春の月夜を眺めている大臣たちの耳に神楽の音が聞こえ、目の前に光がさしたかと思うと、伊邪那岐（イザナギ）が現われます。そして、天神七代地神五代を経て今の御世に至るまで「風は吹けども地は山は動かず」と、天下泰平を喜び、さまざまな神遊びを繰り返した後、わが国が幾久しく栄えることを約束するのでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

ふり下げし鉾の滴り露凝りて。一島となりしを。淡路よと見つけし。ここぞ浮橋の下ならん。げにこの島の有様。東西は海まんまんとして。南北に雲峰をつらね。宮殿にかかる浮き橋を。立ち渡り舞う雲の袖。さすは御鉾の手風なり引くは。潮の時つ風。治まるは波の芦原の。国富み民も豊に。万歳を謡う春の声。千秋の秋津洲。治まる国ぞ久しき。治まる国ぞ久しき。

芦刈（あしかり）

【分類】 四番目物（男物狂物） *男舞

【作者】 世阿弥（古能を改作）

【主人公】 シテ：日下左衛門（直面）

【あらすじ】（今回の仕舞[『笠ノ段』]の部分…下線部）

津の国の日下の里（大阪府東大阪市）の住人の左衛門は貧乏のすえ、心ならずも妻を離縁します。妻は、京の都に上って、さる高貴な人の若君の乳母となり、生活も安定したので、従者を伴って難波の浦へ下り、夫の行方を尋ねます。在所の者に聞いても、以前のところにはいないということで、途方にくれますが、しばらくの間、付近に逗留して夫を捜すことにします。一方、左衛門は落ちぶれて、芦を刈りそれを売り歩く男になっています。しかし、彼はその身の不遇を嘆くでも怨むでもなく、すべてを運命と割り切って、時に興じ物に戯れ、自分の生業に満足しています。そして、ある日妻の一行とも知らず、面白く囃しながら芦を売り、問われるままに、昔、仁徳天皇の皇居があった御津の浜の由来を語り、笠尽しの舞をまっけて見せます。いよいよ買ってもらった芦を渡す段になって、思いがけず妻の姿を見つけ、さすがに今の身の上を恥じて、近くの小屋に身を隠します。後を追おうとする従者をとどめ、妻は自分で夫に近づき、やさしく呼びかけます。夫婦は和歌を詠み交わして、心もうちとけ、再びめでたく結ばれます。装束も改めた左衛門は従者のすすめで、さわやかに祝儀の舞をまい、夫婦うち揃って京の都へ帰ってゆきます。

【詞章】（今回の仕舞[『笠ノ段』]の部分の抜粋）

あれ御覽ぜよ御津の浜に。網子ととのうる網船の。えいやえいやと寄せ来たるぞや。名にし負う難波津の。名にし負う難波津の。歌にも大宮の。内まで聞こゆ網引きすと。網子ととのうる。海士の呼び声と詠みおける。古歌をも引く網の。目の前に見えたる有様。あれ御覽ぜよや人人。おもしろや心あらん。おもしろや心あらん。人に見せばや津の国の。難波わたりの春の景色。おぼろ舟こがれ来る。沖のかもめ磯千鳥。連れだちて友呼ぶや。海士の小舟なるらん。雨に着る。田蓑の島もあるなれば。露も真管の。笠はなどか無からん。難波津の春なれや。名に負う梅の花笠。縫うちょう鳥の翼には。鶺鴒も有明の。月の笠に袖さすは。天つ乙女の衣笠。それは乙女。これはまた。なにわ女の。難波女の。かずく袖笠肘笠の。雨の芦辺の。みだるるかたおなみ。あなたへざらり。こなたへざらり。ざらりざらり。ざらざらざと。風の上げたる。古簾。つれづれもなき心。おもしろや。

鐘馗（しょうき）

【分 類】 五番目物（鬼神物）

【作 者】 金春禅竹

【主人公】 シテ：鐘馗の霊（真角）、後シテ：鐘馗の霊（小癒見）

【あらすじ】（今回の仕舞の部分…下線部）

中国の終南山の麓に住む者が奏聞のため都に上る途中で、怪しげなる者に後ろから呼び止められます。旅人がいかなる人かと尋ねると、自分は進士の試験に落ち自殺した鐘馗という者であるが、悪鬼を亡ぼし国土を守らんと誓いを立てているので、そのことを帝に奏上してほしいと言います。そして、後ほど真の姿を現そうと言って消え失せます。

<中入>

そこで、旅人が読経して鐘馗の亡魂を吊っていると、鐘馗の霊が現れ、宝剣を持って妖魔悪鬼を退治する有様を見せます。

【詞章】（今回の仕舞の部分の抜粋）

鐘馗及第の。鐘馗及第のみぎんにて。われと亡ぜし悪心を。翻す一念。発起菩提心
なるとかや。げに誠ある誓いとて。国土を静めわきてなお。禁裡雲井の楼閣の。こ
こやかしこに遍満し。あるいは玉殿。廊下の下。御階のもとまでも。御階のもとま
でも。剣をひそめて忍び忍びに。求むれば案のごとく。鬼神は通力失せ。現れ出ず
るをたちまちに。ずだずだに切りはなちて。目の当たりなるその勢い。ただこの剣
の威光となって。天に輝き地に遍く。治まる国土となること。治まる国土となるこ
とも。げに有難き誓いかな。げに有難き。誓いかな。

舟弁慶

【分類】五番目物（切能）

【作者】観世小次郎信光

【主人公】前シテ：静御前、後シテ：平知盛の怨霊

【あらすじ】（今回の連吟の部分…下線部）

源義経は、平家追討に武功を立てますが、戦が終わると、かえって兄頼朝から疑いをかけられ、追われる身となります。義経は、弁慶や従者と共に都を出、攝津国（兵庫県）大物浦から西国へ落ちようとしています。静御前も、義経を慕ってついて来ますが、弁慶は時節柄同行は似合わしくないから、都へ戻すように義経に進言し、了承を得ます。弁慶は静を訪ね、義経の意向を伝言しますが、静は弁慶の計らいであろうと思い、義経に逢って直接返事をするといいます。義経の宿に来た静は、直接帰京をいわたされ、従わざるを得ず、泣き伏します。名残りの宴が開かれ、静は、義経の不運を嘆きつつ、別れの舞を舞います。やがて出発の時となり、涙ながらに一行を見送ります。

<中入>

弁慶は、出発をためらう義経を励まして、船頭に出発を命じます。船が海上に出ると、にわかに関風が変わり、激しい波が押し寄せて来ます。船頭は必死に船をあやつりますが、吹き荒れた海上に、西国で滅亡した平家一門の亡霊が現れます。中でも平知盛の怨霊は、自分が沈んだように、義経を海に沈めようと長刀を持って襲いかかって来ます。義経は少しも動ぜず戦いますが、弁慶は押し隔てて、数珠を揉んで祈ります。祈られた亡霊は、しだいに遠ざかり、ついに見えなくなります。

【詞章】（今回の連吟の部分の抜粋）

伝えきく陶朱公は勾踐を伴い、会稽山にこもり居て。種々の智略をめぐらし。ついに呉王を亡ぼして。勾踐の本意を達すとかや。然るに勾踐は。ふたたび世をとり、会稽の恥をすすぎしも陶朱功をなすとかや。されば越の臣下にて。政をみにまかせ。功名富たっとく。心の如くなるべきを。功なり名をとげて身しりぞくは。天の道と心得て。小船に掉さして五湖の遠島をたのしむ。かかる例しも有明の。月の都をふりすて。西海の波濤におもむき御身の科のなきよしを。なげき給わば頼朝も。ついににはなびく青柳の。枝をつらぬる御契り。などかはくちし、はつべき。ただたのため。ただたのため。しめじが原のさしもぐさ。われ世のなかに。あらん限りは。かく尊詠のいつわりなくは。かく尊詠のいつわりなくはやがて御代にいでぶねの。ふな子ども早やともづなを、とくとくと。早やともづなをとくとくと。すすめ申さば判官も旅のやどりをいで給えば。しずかはなくなく、えぼしひたたれぬぎすて。涙にむせぶ御別れ、見る目もあわれなりけり、見る目もあわれなりけり。

弓八幡（ゆみやわた）

【分類】 初番目物（脇能） ＊神舞

【作者】 世阿弥

【主人公】 前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：高良ノ神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

後宇多院に仕える臣下が、如月初卯の男山八幡宮（石清水八幡宮）の如月初卯の神事に陪従として参詣するよう命じられ、八幡宮に向います。やがて八幡宮に着き、参詣しようとする、一人の男を伴い、錦の袋に納めた弓を持った老翁がいます。不思議に思って尋ねると、老翁は「私は長年この八幡宮に仕えているもので、桑の弓を君に捧げようと思い、あなたを待っていたのです」と答えます。そして、桑の弓を袋に納めたまま君に捧げるいわれなどを詳しく語ります。さらに、八幡宮のいわれを語り、実は自分は高良の神で、君を守るためにここに現れたと言い、かき消すように消えてしまいます。

<中入>

臣下が神託を伝えるため、都に帰ろうとすると、どこからか音楽が聞こえ、良い香が薫ってきます。するとそこへ、高良〔かわら〕の神がその姿を現し、舞を舞い、御代を祝い、八幡宮の神徳を讃えます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

君を守りの御誓い。もとより定めある上に。殊にこの君の神徳。天下一統と守るなり。げにげに神代今の代の。しるしの箱の明らかに。この山上に宮居せし。神の昔は。ひさかたの。月の桂の男山。さやけき影は所から。畜類鳥類鳩吹く松の風までも。皆神体と現れ。げにたのもしき神ごころ。示現大菩薩八幡の。神徳ぞ豊かなりける。神徳ぞ豊か。なりける。

誓願寺（せいがんじ）

【分類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：里女（面・増女）、後シテ：和泉式部の霊（面・増女）

【あらすじ】（仕舞 [キリ] の部分…下線部）

一遍上人が熊野権現に参籠している時に、「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」の札を広めよという霊夢を見ます。そこで、上人は都に上り、念仏の大道場、誓願寺で御札を配ばります。すると、一人の女性が御札の言葉を見て、「六十万人より外は往生できないのでしょうか」と問いかけます。上人は、「これは霊夢の、六字名号一遍法、十界依正一遍体、万行離念一遍証、人中上々妙好華の四句の上の字をとったものであり、南無阿弥陀仏とさえ唱えれば誰もが必ず往生できる」と説きます。すると女性はありがたがり、「本堂の『誓願寺』の寺額に替えて、上人の手で『南無阿弥陀仏』の六字の名号をお書きください。これはご本尊阿弥陀如来の御告です。私はあの石塔に住む者です」と言って、近くの和泉式部のお墓に姿を消します。

<中入>

一遍上人が『南無阿弥陀仏』の名号を書いて本堂に掲げたところ、どこからともなく良い香りがし、花が降り、快い音楽が聞こえ、瑞雲に立たれた阿弥陀如来と二十五菩薩と共に、歌舞の菩薩となった和泉式部が現れます。そして、誓願寺が天智天皇の勅願によって創建された縁起を語ります。続いて、阿弥陀如来が西方浄土より誓願寺に来迎される模様などを表す荘厳優美な舞が舞います。最後に、菩薩聖衆みな一同に本堂の六字の額に合掌礼拝します。

【詞章】（仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

ひとりなお。仏の御名を。尋ね見ん。おのおの帰る法の場人。法のにわびと法の場人の。声も妙なり称名の数数。虚空にひびくは。音楽の声。異香薫じて。花ふる雪の。袖をかえすや返す返すも。貴き上人の利益かなと。菩薩聖衆は面面に。御堂に打てる。六字の額を。皆一同に。礼し給うは。あらたなりける。奇瑞かな。

芦刈（あしかり）

【分類】 四番目物（男物狂物） *男舞

【作者】 世阿弥（古能を改作）

【主人公】 シテ：日下左衛門（直面）

【あらすじ】（今回の仕舞[キリ]の部分…下線部）

津の国の日下の里（大阪府東大阪市）の住人の左衛門は貧乏のすえ、心ならずも妻を離縁します。妻は、京の都に上って、さる高貴な人の若君の乳母となり、生活も安定したので、従者を伴って難波の浦へ下り、夫の行方を尋ねます。在所の者に聞いても、以前のところにはいないということで、途方にくれますが、しばらくの間、付近に逗留して夫を捜すことにします。一方、左衛門は落ちぶれて、芦を刈りそれを売り歩く男になっています。しかし、彼はその身の不遇を嘆くでも怨むでもなく、すべてを運命と割り切って、時に興じ物に戯れ、自分の生業に満足しています。そして、ある日妻の一行とも知らず、面白く囃しながら芦を売り、問われるままに、昔、仁徳天皇の皇居があった御津の浜の由来を語り、笠尽しの舞をまて見せます。いよいよ買ってもらった芦を渡す段になって、思いがけず妻の姿を見つけ、さすがに今の身の上を恥じて、近くの小屋に身を隠します。後を追おうとする従者をとどめ、妻は自分で夫に近づき、やさしく呼びかけます。夫婦は和歌を詠み交わして、心もうちとけ、再びめでたく結ばれます。装束も改めた左衛門は従者のすすめで、さわやかに祝儀の舞をまい、夫婦うち揃って京の都へ帰ってゆきます。

【詞章】（今回の仕舞[キリ]の部分の抜粋）

浮世忘るる難波江の。浮世忘るる難波江の。芦の若葉を越ゆる白浪も。月も残り。
花もさかりに津の国の。こやの住まいの冬ごもり。今は春べの都の空に。誘われわたるや大伴の。御津の浦わの見つつを契りに。帰る道こそ嬉しけれ。

難波（なにわ）

【分類】初番目物（協能） *楽

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：王仁（面・悪尉）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

廷臣が従者と共に熊野から京の都に帰る途中、難波に立ち寄ります。すると杉箒を持った老翁が連れの男と共に現れ、天下泰平の春を詠いながら、梅の木陰を掃き清めます。廷臣が老人たちに梅の木のいわれを尋ねると、老翁は難波津の歌、仁徳帝の慈愛、難波の都の平和と繁栄について語り、自分は仁徳帝の即位を推進した百済国の王仁であると名乗り、舞楽を舞うことを約して立ち去ります。

<中入>

難波の春の夜に木華開耶姫と王仁が現れて名乗ります。そして木華開耶姫が梅の花を詠じて舞を舞います。続いて王仁が難波を祝福して舞楽を舞います。舞楽のうちの古の聖賢をたたえ、治世を祝福します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

あら面白の音楽や。あら面白の音楽や。時の調子にかたどりて。春鶯囀の楽をば。春風ともろともに。花を散らしてどうど打つ。秋風楽はいかにや。秋の風もろともに。波を響かしどうど打つ。万歳楽は。よろず打つ。青海波とは青海の。波立て打つは。採桑老。抜頭の曲は。返り打つ。入り日を招き返す手に。入り日を招き返す手に。今の太鼓は波なれば。寄りては打ち、返りては打つ。この音楽に引かれて。聖人御代にまた出で。天下を守り治むる。天下を守り治むる。万歳楽ぞめでたき。万歳楽ぞめでたき。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといえます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(鬘[かつら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管):竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓: 台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して10~20分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。

★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。

精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。

「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。

働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>